

技術教育研究会と私の歩み

14

佐々木 享

公開研究会の定着

技教研の研究関心やその成果を内外の人々とともに討論する公開研究会（または公開シンポジウム）という活動は、先の第1回にとどまらず、その後確実に定着した。私が事務局長の時代には以下のようなテーマで開催された。

■第2回（74年2月）公開シンポジウム・労働と教育

この研究会は、誕生したばかりの愛知の高校教師を中心としたサークルを中心として、岐阜県恵那の上矢作で労働教育に取り組んでいた小学校の先生を招いて名古屋市において開催した。このシンポジウムは盛会で、成功した。この時期の民主的な教師たちの「労働」への関心の高さを象徴していたといえよう。

■第3回（75年2月）高校教育の民主化と職業教育

この研究会は、次に述べる問題に関連して開催された。

■第4回（76年3月）技術論と技術教育

技術教育研究とくにその理論的問題の解明に当たって、技術論を避けて通ることはできない。ところが技術論については周知のように厳しい論争がある。私がこの論争に一定の意見をもっていることを知った長谷川淳先生は、おつき合いをお願いするようになったかなり早い時期に、技術教育研究に技術論争を持ち込まないで下さいよと釘をさされた。だから技教研では、技術論を正面から議論したことはなかった。それを公開研究会で取り上

げたのは、山脇与平先生の強い主張だったと記憶する。結果からいえば非常に成功したといえるが、この公開研究会への長谷川先生の対応をなぜか思い出すことができない。いずれにせよ、技術論が技教研の中でタブーではなくなったことは画期的だった。

これら公開研究会で取り上げたテーマはどれも重要だったから、いずれも後に『技術教育研究』の特集号としてまとめられている。

日教組の教育制度検討委員会の
地域総合高校構想を批判する

1970年代に入り、日教組の委嘱した教育制度検討委員会が活発に活動して、相次いで教育制度改革構想を発表した（勁草書房版『日本の教育をどう改めるべきか』『続日本の教育をどう改めるべきか』を参照）。この報告書が提起した「地域総合高校」構想は、多くの教師たちから注目された。私たち技教研の人々も注目したが、それは「地域総合高校」構想が高校職業教育の存在意義を軽視し、職業学科の解消を提言しているようであり、もっと強くいえば、高校の職業教育を解体することが高校教育を民主化することであるかのような主張に見えたからある。原正敏先生や私が雑誌『教育』や雑誌『技術教育研究』の誌面をかりてその非なることを精力的に批判し、また各種の研究会できちんと批判したことは、工業高校教師に共感され、歓迎された。これが、高校教師会員が急増した背景になっていたように思われる。

高校教育研究事始め——『高校教育論』

日教組の委嘱した教育制度検討委員会の「地域総合高校」構想を批判するしごとをすすめる中で私は、現代日本には、私たちが依拠すべき高校教育研究の蓄積がほとんどないに等しいことを知った。そのため、批判活動は単なる批判にとどまらず、高校教育研究ひいては中等教育研究の色彩を帯びざるを得なかった。私は本格的系統的に教育学を学んできたわけでもないで、私自身が教科研の常任委員でもあったことを活用して、教科研常任委員会の了解を得て、74年12月から76年2月までに5回ほど技教研と教科研合同の「高校教育を考える」研究会を開催したりしてやや原理論的なところから学習を始めた。「地域総合高校」構想に対する批判活動のよりどころを確立するために私自身は内外の文献をあさったが、その中で、教育課程（戦前のことばでは学科課程）の変遷を実証的に解明してその教育的意義を問う、という戦前日本が生んだ教育学者阿部重孝の方法論は魅力的だった。（阿部重孝の名前を最初に教えて下さったのは長谷川淳先生だった。阿部には技術教育や職業教育に関する著作はなかったけれども、その方法論に惹かれてこの頃から私は散在していた阿部の著作をあさり始めた。阿部については後にもう一度触れる。）いずれにせよ、『教育』や『技術教育研究』に掲載された私の稚拙な論策は、大月書店の河内氏の勧めで1976年に『高校教育論』として刊行された。この本は、高校教育に関する書物など売れるはずがないという私の予想を裏切って教育書には珍しく歓迎された。

私の『高校教育論』が発行された直後に、明治図書から宮坂広作『高校教育改革論』が刊行された。以前、宮坂さんの論文から海後宗臣が戦時下にした素晴らしい中等教育論があることを教えられたことがあったが、この『高校教育改革論』は制度論ではなく、高校教

育の授業の充実を提起する論策だ、というのが私の印象だった。

『技術と教育』への会報の名称変更

発足以来の会報は、たんに『技術教育研究会会報』と称していた。何となくもの足りなかったので常任委員会では新しい題名を募ったけれども名案がなく、結局、第91号（1975年2月）より現在の『技術と教育』に変更した。

自然科学の古典を読む

技教研の活動のことからはずれて恐縮であるけれども、この頃の勤め先の専修大学での思い出に触れることをお許し願いたい。この大学で私は、「自然科学書誌解題」という司書の資格をとるための講義をしたことがある。受講者は毎年多くて数人、少ない年は1人だった。最初は試行錯誤だったけれども、後には、自然科学関係の文献は文系とは違い単行本は少なく、むしろ雑誌や特許公報が主であることを考慮して、まず始めに、学会誌、抄録誌、速報誌など各種の雑誌やその論文の形式、索引の仕方、特許制度の話などをさささと済ませてしまい、後半の時間では自然科学の古典を読むことにした。年度により異なったが、ダーウィンの『種の起源』、パストールの『生命自然発生説の検討』、オパーリンの『生命の起源』などを翻訳書に頼ってではあるけれども、時間をかけてじっくり読むというやり方である。たいていの人はいこれらの古典の名前だけは知っていても、それを熟読するなどという機会は少ない——もしかすると殆どないから、これはめっぽう楽しい授業だった。細かく読みすすめると、そこでは、古い観念をうち砕き新しい概念をしっかりと組み立てるに当たって先人が苦心した論点や論証の方法を読みとることができた。そこには社会科学の古典を読むのとはやや違った面白さがあった。 (続く)